

かささぎ通信 第125号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 5月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年四月の「森三郎の作品を読む会」では「めぐりあひ」
『赤い鳥』[1934.8] 所収作と『かささぎ物語』帝国教育会出版部
[1942.8] 所収作)の読み比べをしました。

「めぐりあひ」は江戸の両替商の銭箱の中にいた四文銭と一文銭の仲の良い兄弟が、両替に来た旅商人の手に渡り、それぞれ次から次へと不思議な苦しい旅を続け、最後に元の両替商の銭箱の中で再び巡り会うという話です。この話についてはこれまでに「かささぎ通信」47号、70号で触れてきました。「めぐりあひ」は寛政五(一七九三)年刊行の黄表紙『再会親子銭独楽(めぐりあふおやおやこのぜにごま)』作・唐来三和(とうらいさんな)、画・北尾政美(きたおまさよし)を基にした創作であること、三郎が『赤い鳥』に「めぐりあひ」を発表する直前に兄の森銑三が「黄表紙作家としての唐来三和」を『歴史と國文学』(一九三四年二月号~五月号)に発表している、それが三郎の「めぐりあひ」創作のきっかけになったであろうことが分かっていきます。詳細は神谷磨利子「森銑三・森三郎兄弟と刈谷」(刈谷市郷土文化研究会会誌『かりや』三八号 pp.65-78)で報告していただきます。今回は実際に『再会親子銭独楽』(国立国会図書館デジタルコレクション)の文と絵を見ながら、三郎の「めぐりあひ」を確認しました。



上図は両替屋の場面。帳場格子奥の△は銭を量る天秤。□は右から姉娘(耳白・みみしろ、一文銭)、母(四文銭、着物は青海波)、弟(銑銭・づくせん、一文銭)の親子三人。三郎の「めぐりあひ」は兄の四文銭と弟の一文銭の兄弟という設定に変えています。



拡大図



右図の拡大部分○の絵はちよんがれ法師の錫杖に付けられている弟の銑銭です。この場面は三郎の「めぐりあひ」にはありませんでしたが、○の絵の上の□部分には「おまえとわつちが九尺二けん(間)のたな(店)でももつたら」と書かれています。この言葉を読んでハッとしました。ちよんがれ法師とは前回の「鸚鵡」の願人坊主の一種です(「かささぎ通信」124号参照)。『赤い鳥』の「鸚鵡」では願人坊主が「さあんげ、さんげ、六根清浄」と歌っていましたが、『かささぎ物語』(帝国教育会出版部)の「鸚鵡」はまさにこの「おまえとわつちと(ママ)九尺二間の店でももつたら」と願人坊主が歌い、「チャンガラモンガラ」錫杖を鳴らすところから始まっていたのです。三郎が黄表紙のこの言葉を使っているのだということが思いがけず確認できました。

黄表紙との関連のある森三郎の作品には他にも、『かささぎ物語』の翌一九四三年に刊行された『うぐいすの謡』の「ものぐさ物語」「おどけ百人一首」(「かささぎ通信」114号、119号参照)がありました。黄表紙を素材にしたことで、滑稽と言葉遊びのリズムを感じさせる作品でした。

同時期、三郎は「黄表紙と小波」(『小国民文化』一九四三年一月号)で、黄表紙の特色は「羽目をはづした、ふざけた面白さにある」と述べています。そして「子供には『詩』も『夢』も『笑ひ』をも与へてやりたい」と言っています。黄表紙に素材を求めた三郎の意図が分かります。

次回予定 二〇二三年六月九日(金) 午後一時半~三時半

「うぐいすの謡」(『うぐいすの謡』[1943.8] 所収作)

六月四日(日) 午後一時半、森三郎に親しむ集い 所・中央図書館